

「場所・群馬」白川昌生、再展示!

YOSHIO SHIRAKAWA

歴史、記憶、日常、自然—(出品作品/作家蔵)

《臨江閣鑑金名簿 1994年》 臨江閣本館は1884(明治17)年、下村善太郎前橋の生糸商や製糸業者、銀行などの企業、町民有志の寄付金により建設された。本館には明治天皇や皇族が滞在し、別館は1910(明治43)年の一府十四県連合共進会で貴賓館として使われた。近代前橋のまちづくりの原点といえる場所で作品を発表するにあたり、白川は文献にあった臨江閣鑑金名簿に着目した。140年前の先人の営みは、当時と変わらぬ姿をとどめる建築の空間に立ち現れる。

《前橋と場所 1996年/2023年、再制作》 桑苗の市でにぎわった桑町、染め物の職人が住んだ紺屋町一。旧町名は地域の風景や人々の暮らしを表している。「住居表示に関する法律」(昭和37年施行)によって前橋の旧町名の多くは消滅したが、この作品は旧町名がもたらしてきた場所の記憶や物語をモチーフとしている。作品の素材は、古くから食べ物や包装材として使われてきた経木(きょうぎ、へぎ)。旧町名と同様、経木もまた、かつて私たちの生活と密接に関わっていた存在である。



《道草の歌II 1996年》 群馬の絹布に「君が代」「草津節」「桐生八木節」「赤城の子守唄」「利根のみなかみ」の楽譜(刺繍)が縫い込まれている。人々がさまざまな時代と場所で繰り返して来た歌。傍らに、白川の生の〈旅〉を象徴するかのよう、ヨーロッパで暮らした時代に使っていた革の靴、その頃よく食べたじゃがいも、ノート、トランジスタラジオが下がる。白川は歌と旅を題材に、たゆたうような日常と不確かな現実世界のなかで生きる人々と自身の生、その〈反復される時間の存在〉を「道草」という言葉に託して作品化した。

《サバイバルアート/島岡酒造再建計画 2006年》 1863(文久3)年創業の島岡酒造(太田市)は、2006年2月の火災で酒蔵の多くを焼失した。新聞で火災を知った白川は、島岡酒造に再建を支援するプロジェクトを提案した。この作品はプロジェクトの一環で同年、前橋の旧麻屋百貨店(2011年解体)で展示された。利根川べりで島岡酒造の代表銘柄「群馬泉 淡緑(うすみどり)」をほこらしげに、愛おしそうに手にする女性。それらを包み込んでいるのは、地域の豊かな自然である。

から、知己のアーティストに呼びかけ、前橋の北関東造形美術館と臨江閣で「場所・群馬」の展示会を重ねます。すでにベルリンの壁崩壊やソ連の解体といった歴史的出来事が冷戦終結を告げ、グローバル化の動きが加速してまいりました。白川らはこの時期、明治期の近代和風建築で後に国重要文化財となった臨江閣と遭遇し、地域の記憶や空間にまつわる具体的な気づきとインスピレーションを得て、「場所」と交響するアートに結実させました。近代批判の実験場ともいうべきこれらの活動を経て、白川はこの後、代表作となる「無人駅での行為(群馬と食)」(2000年)や「駅家の木馬」(2011年)の地点に到達します。

「場所」と交響するアート 近代批判の実験場

白川昌生はヨーロッパでの13年間にわたる活動に区切りをつけ、1983年に帰国しました。その後、白川は空間表現を求め、造形作品と文化的問題を主題とする作品という二つのアプローチによる制作に向かい、現在まで自身をとりまく自然や風土、歴史、文化から生まれる表現を探求してきました。それは明治維新にはじまる日本の近代化と、その過程で成立した西欧を規範とする美術の概念や制度について、白川自身が日本のなかで(自己の内)キメラを見定めつつ、西欧的な思考や感覚を乗り越え、新たな表現にたどりつこうとした軌跡でもあります。単独行でその模索を始めた白川は1993年に「場所・群馬」を宣言、翌年

「場所・群馬」

白川昌生の呼びかけにより1993年に始まった芸術運動。活動拠点となった北関東造形美術館をはじめ、歴史的建築、商店街、無人駅などさまざまな場所で、それらの場所がもつ記憶や空間、文化・社会的背景を主題とする表現を提示した。世界レベルでシステムの画一化、均一化が進む美術の動向に対し、「場所」から生まれる(非画一性)〈特異性〉(地方性)〈屈折〉などを表現の出発点に据えて活動を展開した。しかし、地域活性化の流れに合わせるように2000年代以降急速に全国的に広がったいわゆる(地域アート)とは一線を画す。白川自身、地域への経済効果を前面に押し出すアートプロジェクトには疑問を投げかけている。「場所・群馬」成立第一宣言(93年)、「場所・群馬」第二宣言(95年)に活動方針とともに代表として白川の名前が記されているが、構成メンバーを特定することなく、展覧会ごとにゆるやかに離合集散してきた。

「場所」とは、
単なるひろがりのある
空間のことではない。
その空間に存在し、
関係している、
してきた
すべてを含みこんで
現れてくるものである。
(白川昌生)



白川昌生(しらかわ・よしお)
美術家。1948年、北九州市戸畑生まれ。70年に渡欧。国立デュッセルドルフ美術大学卒業(マイスター)。83年に「日本のタダー—日本の前衛1920—1970」展(デュッセルドルフ市立美術館、後に東大教養学部美術博物館、オックスフォード現代美術館へ巡回)を企画、同年に日本帰国。群馬を拠点に国内外の展覧会に参加。93年に「場所・群馬」宣言。アーツ前橋で企画展「白川昌生 タダ、タダ、タ 地域に生きる想像☆の力」(2014年)。「贈与としての美術」(水声社)など多くの著作がある。旺盛な執筆活動と発言は、白川の重要な表現行為となっている。

「場所・群馬」白川昌生、再展示!

2023年3月1日(水) ▶ 5日(日)
10:00~17:00(5日は16:00まで)

臨江閣本館2階

入場無料

アーティストトーク

「臨江閣との邂逅」

3月4日(土) 14:00~15:30 参加希望者は直接展覧会場へ。

白川昌生、ゲスト/村田敬一(群馬県文化財保護審議会委員、前橋工科大学客員教授)



【主催】「場所・T house」プロジェクト実行委員会

【後援】群馬県、群馬県教育委員会、前橋市、前橋市教育委員会、前橋商工会議所

【協力】アーツ前橋、島岡酒造

【問い合わせ先】090-1400-1544(田中是宇)

Eメール: choreo.thouse@gmail.com

臨江閣 前橋市大手町3-15

【交通のご案内】開越自動車道 前橋ICより約10分/JR前橋駅からバス(群馬中央バス新前橋駅西口行き)で10分、遊園地地下にて下車。徒歩5分[駐車場]隣接する前橋公園の駐車場をご利用ください。臨江閣の敷地内は駐車できません。